60

柳宗元疾病攷

小髙　修司
中醫クリニック・コタカ

柳宗元（773–819年）は中国中唐期の政治家・文人である．字は子厚，また柳河東とも呼ばれる．王維や孟浩然らとともに自然詩人として名を馳せ，散文の分野では，韓愈とともに宋代に連なる古文復興運動を実践し，唐宋八大家の1人に数えられる．

徳宗の貞元9年（793年）に進士に挙げられ，貞元14年には難関の官吏登用試験である博学宏詞科に合格，集賢殿正字（政府の書籍編纂部員）を拝命した．新進気鋭の官僚として藍田（陝西省の県名）の警察官僚から監察御史（行政監督官）を歴任した．

8世紀末の唐は，宦官勢力を中心とする保守派と対決姿勢を強め，政界の刷新を標榜する若手官僚グループの台頭が急であり，柳宗元も参加するが，保守派の猛反発に遭い，改革政策はわずか7ヶ月であえなく頓挫し，礼部侍郎に就任し，これからという時に宗元の政治生命は尽きた．政争に敗れた宗元は死罪こそ免れたものの，都長安（西安市）を遠く離れた永州（湖南省）へ，司馬（今の日本の副知事に当たる）として左遷された．時に宗元33歳．さらに元和10年（815年）には，いったん長安に召還されるものの，再び柳州（広西省壮族自治区）刺史（地方長官；知事に当たる）の辞令を受け，ついに中央復帰の夢はかなわぬまま，元和14年，47歳の若さで歿した．

悲憤慷慨のまま生涯を終えざるを得なかった宗元であるが，実はさほど多くの病情について語ってはいない．暑湿の地である永州や柳州での居住は当然ながら痰飲湿邪を背景とする種々の疾病を来す可能性が高い．この点に触れた詩文も散見されるが，彼の最も特徴となる症状は「痞」であろう．例えば『柳河東集』巻三十「許京兆孟容に寄する書」には次の文が見られる．

> 憂い殘り骸餘り魂の百病集う所，痞結の伏積り，食せざるに自ずと飽（はらふくる）る．

ここに述べられている症状は「胃気痞塞」そのものである．胃気滞の背景にあるものは「肝気鬱結」であり，それが彼の政治的環境に基因することは明らかであろう．

ストレスにより気が滞るのは「肝」「胆」そして「膈（鬲）」である．鬲に関しては既に『史記』（前90年頃，司馬遷）「扁鵲倉公伝」診藉二に「気鬲病」，診藉十四に「鬲塞不通不能食飲」といった記述が見られる．また白川静の『説文新義』が云うように，「鬲」は邪霊の侵入の拒絶を意味する重要な部位である．それが人体生理上最も重視される，流れるものとしての気が阻滞する部位としての「膈」の重要性と結びついていった可能性が指摘できよう．

またこれに関連して島田は，『霊枢』以降に用いられている膈が具体的な横隔膜を指しているのに対して，『素問』及びそれ以前の「鬲」及び「隔」には，その機能面において聖（胸中）と俗（腹中）とを分かつ神聖な役割をも持たせていたのではないかという重要な指摘を行っている．

以上のように「痞」を中心とする宗元の疾病について述べ，併せて考察を行う．